

皆さまこんにちは、国際課の阪口です。私は、2016年9月から約2年半山東省で生活をしてきました。この2年半の間に済南市では山東師範大学で中国語を学び、濰坊（イボウ）市では市政府で行政研修を受け、現在住んでいる青島（チンタオ）市では民間企業で研修を受けています。山東省の省都である済南市からスタートし、濰坊市、青島市と東へ東へと移動しながら3つの街で過ごし、様々なことを体験させていただきました。

ご存知の通り中国は非常に広い国です。同じ山東省内の街といえども、済南市と濰坊市が直線距離で約200km、濰坊市と青島市で約160km離れており、それぞれの街で方言があり、街の風景が違い、食べ物の味付けが違い、移動する度に新しい街に来たなあと感じました。

印象に残っているのは、濰坊市政府外事弁公室（国際関係の担当部署、以下「外弁」）での体験と風景です。濰坊市政府では全部署がそれぞれ、掌握事務に関係なく、市内のひとつの貧困農林魚村を受け持ち、その村の振興を行っています。振興施策は、職員の村での駐在、村民の研修・視察旅行の実施、道など生活インフラの整備、農林水産業に関する教材や資料の提供などです。私の研修中に農村での業務があり、同行しました。農村にたどり着く道は一本だけで、途中からは舗装されていない凸凹道でした。道も振興施策の一つとして近い将来に舗装する計画があると聞きました。私が行った農村は全部で200人くらいの住人がいて、主にショウガなどを作っており、農家の年収は日本円で約2、3万円とのことでした。



（濰坊市にある村）

小さな村の中を歩きましたが、集落の周りは畑だけがあり、にわとりが自由に歩いており、とても静かでした。一応道と街灯はあるものの、車も店もなく、普段生活している濰坊市街地と車で2時間程度しか離れていないのに環境の違いの大きさに驚きました。

この農村に外弁の職員が駐在していて、彼の家には土間、中庭、倉庫、トイレがあり、大きな造りでしたが、村の家全てが同じ造りらしいです。その家でトイレに行く時、職員が「トイレに落ちるなよ」と笑いながら僕に忠告してくれたのですが、トイレに行くと、そこはトイレというよりかは小屋で、ただ、向こう側が大きく削られているだけでした。これは、し尿を後で肥料に使用するため、便利のようにそういう簡単な作りになっているということでした。業務が終わってから、村の代表者ら数人と一緒にその家でお昼ご飯を頂いたのですが、そこで、この村に外国人が来たのは初めてだと凄くびっくりしていました。そして私が箸でご飯を食べていると、「日本人も箸でご飯を食べるのか！」と村民の一人が非常に驚いていましたが、中国では日本も箸を使う文化だとみんな知っているものだと思っていたので私も驚きました。

経済発展が著しく、資産が一億円以上あるような裕福層も数多くいる一方、年収2.3万円の農民を多く抱える国であるというのは知識で知っていましたが、実際その村に行ってみると都市部や街とは生活様式や教育環境など、全てにおいて違いが大きく、まるで違う国に来たかのような印象を受けました。中国は今、この格差が大きな問題となっており、農村部での所得改善に力を入れているとニュースで見ますが、今後どのような施策でどのように改善されていくのか、問題の大きさを実感しました。参考に、今住んでいる青島の写真も掲載します。

昔から日本に多大な影響を与えてきた隣国であり、更に現在では関空から、例えば青島まで飛行機で3時間弱で着くような、時間面でも非常に近くなった中国ですが、やはり住んでみると生活習慣や人の考え方、様々なものが日本と違い、本当に多くを学び、様々な経験をさせていただいた2年半の山東省での生活でした。



（青島市新市街地）



（青島市旧市街地）

〈阪口昂（平成28年9月より中国山東省に派遣中）〉